

は前拍で終わってしまっているため下降はほとんど見られず、すぐ小上昇がはじまる。平板型の場合も第3拍開始時から小上昇が始まる。第3拍の後半部分は、先行語アクセント型により、第3拍開始時のF0値に違いがあるため下降率や持続時間に差があるものの、パターンとしてはいずれも大きな下降があり、どのアクセント型に付く場合でも、従来の指摘の通り小上昇後大きな下降線を描き、句全体としては2つの峰がある山型のパターンを描くことが改めて確認できた。これは、他のイントネーションには見られない特徴である。一方、当該イントネーションとがっかりしたような下降調のイントネーションは、特に平板語に付く場合、相互によく似たパターンを示す場合があり、両者の識別がどのようになされるのかについて、さらなる調査が必要であることがわかった。

しかし、実際の談話に現れる当該イントネーションは、よりバリエーションに富んでいる。そして、上記のがっかりした調子以外にも、当該イントネーションと紛れやすいイントネーションの存在も予想される。また当該イントネーション自体も、実際にはそうとは聞こえない(気にならない)ものから、多くの人が嫌うような典型的なものまで様々な音声上の変種があることはすでに指摘されている通りである(井上 1992a, 1993, 1994, 1997, 原 1993b)。

ここで扱った資料では、場面や対話者の違いによって現れる可能性のある発話者個人内のバリエーションや、話者間の差については言及することができない。2-4で述べるが、当該イントネーションを伴う発話と言っても、その認知や受容のされ方、その発話から受ける印象は様々である。実際の談話における当該イントネーションの各変種の音声についても詳しく調べる必要がある。当該イントネーションから受ける印象の違いが、何に起因するのか、そしてそれが当該イントネーションから受ける発話にどのような評価をもたらすのか、という問題については、2-4で明らかにする。その際、再び当該イントネーションの実際の談話における音響上の特徴についても触れることになるだろう。次の2-3では、一旦音声から離れて、当該イントネーションの実際の談話における現れ方を具体的に見るとともに、その談話・文法上の機能、文体(話体)表示機能(以下すべて文体表示機能と略す)を、他のイントネーションや間投助詞の含まれる談話と比較しつつ実例を通して明らかにする。

2-3. いわゆる「尻上がり」イントネーションの談話・文法上の機能

ここでは実際の談話に現れた当該イントネーションを伴う発話を具体的に検証して、その談話・文法上の機能を探る。はじめに当該イントネーションの出現箇所、不出現箇所に関する傾向をまとめ、次いで当該イントネーションの談話・文法上の機能、さらには、文体表示機能に

ついて明らかにする。

2-3-1. いわゆる「尻上がり」イントネーションの現れやすい箇所

はじめに当該イントネーションの現れやすい箇所について、場面と言葉の上での特徴に分けて見ていく。当該イントネーションが使われる場面について、川上(1993)は「講演ではないけれども多少 public な談話で聞かれることは確かである」と指摘し、柴田(1977a)は「④不特定の大勢を前にして話すときに多い」と指摘した。また当該イントネーションの現れる言葉の上での特徴は、柴田(1977a)が「①文中にだけあらわれる、②説明文のなかに出る、③理由を述べるカラ・ノデ、条件を示すナラ・ケレド、提示のワ、主語のガなどのところに出る。」と述べている。これらの指摘や以下の資料 A から、当該イントネーションの出現しやすい箇所を場面と言葉に分けてまとめると以下のようなになるだろう。まず、当該イントネーションの出現しやすい場面は以下の2点に集約できる。

<A> 「比較的」改まった場面(資料 A-1~3(後半)、5、7)

 何かを説明したり解説したり、筋道を立てて考えながら話す場面(資料 A-1~3(後半)、5、7、15)

<A>に関して、単に「改まった場面」としないで「比較的」とした理由は2-3-2で詳しく述べるが、実際アナウンサーのような「正統」な話し方が要求されるような非常に「改まった」場面では現れにくい。また「改まり度」の捕らえ方に個人差がある点にも注意する必要がある。同じ場面でも「比較的改まっている」と感じる人もあれば、「非常に改まっている」と感じる人もいる。従って、同じ場面でも当該イントネーションが誰の発話にでも等しく出現するとは限らない。またこれはについても言える。しかしに関しては当該イントネーションの使用者ならば、友人同士のおしゃべりにも現れる。つまり、改まりの度合いという尺度だけでは当該イントネーションの出現・不出現を決定することはできないということである。

次に当該イントネーションが現れる言葉の上での特徴をまとめよう。当該イントネーションの出現可能な箇所は間投助詞と同様、原則として文末以外の文節末であるが、特に現れやすいのは、以下の<1>~<4>の最後の拍においてである(3-4-5、図Ⅲ17参照)。

<1> 「カラ」、「ノデ」、「タラ」、「ケレド」などの接続詞、接続助詞。

- <2> 「～トカ、～トカ」や「～シテ、～シテ」など例を列挙する時に使われる助詞等。
- <3> 話し始めや「マズ」、「ヤッパ(リ)」などの副詞、話題転換直後に現れる「デモ」、「ダカラ」などの接続詞。
- <4> 提題・対比の助詞「ハ」。

以上の4点は言葉の上での現れやすい箇所である。そしてこれら言葉が現れる発話文の特徴は、その長さが比較的長いという点である。上記の当該イントネーションが現れやすい場面も、比較的長い発話文で構成されていることが多く、<1>～<4>とも重なる。さらに、<1>～<4>についても当該イントネーションが必ず出現するわけではなく、話者によって当該イントネーションの出現頻度は大きく異なる。この点も場面に関しての特徴と同じである。

2-3-2. いわゆる「尻上がり」イントネーションの現れにくい箇所

2-3-1 では、当該イントネーションの現れやすい箇所についてまとめたが、ここでは現れにくい箇所について見ていく。現れにくい場面の特徴は以下のようにまとめられる。

- <X> 非常に緊張した場面や非常に改まった場面。朗読。(資料 A-4, 6, 8～10)
- <Y> 親密な雰囲気のみだった場面。(資料 A-3(前半), 11(中間)～14)
- <Z> 一問一答式インタビューや話しが興にのっていない場面。(資料 A-8～10(前半), 14(前半))

<X>について、当該イントネーションが現れにくいのは実体験から理解できる人も多いだろう。非常に改まった場合では、当該イントネーションが嫌われていることを知る者は使わないように気を付けるからだ。また、そのような場合は書かれたものを準備してそれを読み上げるか、それを参考にして話すことが多く、「朗読」に近くなることもその一因である。なぜ朗読の場合当該イントネーションが現れないかについては、「比較的」改まった場面に関する説明とともに2-3-3で述べるが、当該イントネーションの談話上の機能、対人機能と関係があると考えられる。アナウンサーのようにスラスラと朗読するように話せない場合、年配者は「それはアー」や「それはデスネ」などのフィラーを挟んだ話し方をすることが多い。若者でも、当該イントネーションが好ましく思われていないことを知る人は、非常に改まった場面での使用を控えるよう心がけ、年配者のような話し方になることもある。また、<Z>は<X>とも重なるが、緊張して質問に答えるのに精一杯な場合や、あまり話したくない場合は、ポツリポツリと話す

ことが多く、当該イントネーションの現れやすい、接続詞によっていくつかの節が連なる長い文型が現れにくい。<Y>は<X>の対極にあるが、この場合も当該イントネーションが現れにくい。なぜなら<Y>では間投助詞が多用されることが多いからである。間投助詞が当該イントネーションと補い合う分布をなすことは、上村(1989)、山口(1993)、井上(1994)などによってすでに指摘されている通りである。当然ながら、場面はそこに現れる言葉とも密接に関連し、話者ごとに使い分けに関する規則がある(詳細は2-3-3に譲る)。

次に当該イントネーションが現れにくい箇所を言葉の面からまとめよう。当該イントネーションが現れる可能性のある文節末であっても、以下の<1>～<3>では現れにくい。

- <1> 「アー」、「エー」などのフィラーがあるところ。
- <2> 「ネ(ー)」、「サ(ー)」、「ヨ(ー)」などの間投助詞のあるところ。
- <3> 「文」末。

<1>は当該イントネーションの現れにくい場面<X>と、<2>は<Y>と関連する。同一話者内での当該イントネーションとの使い分け(資料 A-3, 10, 11, 14, 15)も見られるが、当該イントネーションを全く使わない人(ほとんどが年配者)は、場面<X>では「それは アー」や「それはデスネ」などのようにフィラーを使い、場面<Y>では間投助詞を使う。また<3>は場面<Z>と関連する。およそ<Z>のような場面では一人の発話文が短い。すると、当該イントネーションの現れにくい「文」末の出現頻度が高くなる。文末に当該イントネーションが現れる例もある(3-4-5参照)が、継続を積極的に示すのが主な機能である(詳細は2-3-3)当該イントネーションが、終止を思わせる文末表現にかぶさらないとしても不思議ではない。

以上、当該イントネーションの現れやすい箇所、現れにくい箇所を場面と言葉の上からまとめた。次に当該イントネーションの談話・文法上の機能を実際の使用例から明らかにする。

2-3-3. いわゆる「尻上がり」イントネーションの談話・文法上の機能

当該イントネーションの出現・不出現箇所について見ると、それが談話の性質と密接に関連していることに気付く。そして談話の性質はそこに現れる文型とも関連している。ここでは当該イントネーションの談話・文法上の機能について従来の指摘や実際の使用例である以下の資料Aから考察する。

上村(1989)は当該イントネーションに関して、他のポーズ前に現れる非文末のイントネー

ションと同様、「そこが意味の切れ目であって、かつ文がまだ完結していないこと、まだあとにつづきがあることをきき手におしえる機能」を持つと指摘している。さらに井上(1997)は、「他の中止・継続イントネーションと同じく談話を維持する機能を持つ。」とした上で、「話す順番の確保」と「相手への働きかけ」の機能もあることを指摘した。以下の資料 A を具体例として見ていく前に、これらの指摘や筆者の内省から当該イントネーションの主な機能をまとめると以下ようになる。ただし当該イントネーションがいつでも①～④全ての機能を果たすわけではない。

- ① 構文上、情報内容上の切れ目を示す機能。
- ② 次に言うべきことを考える時間を稼ぐと同時に聞き手の情報処理時間を確保する機能。
- ③ 継続することを積極的に示し、話順を確保する機能。
- ④ 聞き手の注意を喚起し積極的参加(あいづち)を促す機能。

ここで資料 A から実際の使用例を見てみよう。①については、例をひくまでもなく、先に見た当該イントネーションの現れやすい言葉の上での特徴からも理解できる。ただし、書き言葉における句読点以上に、どこを切れ目とするかは話者によってばらつきがあり、当該イントネーションの現れ方は一様ではない。資料 A-1 の話者のように、「みんなの話を今聞いててえ(うん) でえ コンビニの人もいれば・・・」、「わたしはあ 今ダイエットしててえ でえ 食べたくないんですよ。」のように当該イントネーションが頻出し、連続する場合すらある。一方で資料 A-4、11、14 のようにフィラーや間投助詞を併用している話者では当該イントネーションは数ヶ所しか現れない。これは、当該イントネーションに代わり間投助詞などが切れ目を示しているからである。上村(1989)が指摘するように切れ目を示す機能は、当該イントネーションだけの特徴ではない。また②は①と同様、当該イントネーション以外にも、フィラーを入れたり、ポーズを長く取ったり、ピッチを高めず句末拍を引き伸ばすイントネーション(本研究では第 3 章以降「停滞調」と呼ぶ。上村(1989)の「ひきのぼし音調」にあたる。)を使ったりなど、同じ機能を果たす他の手段がある。

これに対して③、④については井上(1997)がすでに指摘しているが、当該イントネーション独自の機能と言えるだろう。当該イントネーションの現れやすい言葉の上の特徴<3>話し始めや「マズ」、「ヤッパ(リ)」などの副詞、話題転換直後に現れる「デモ」、「ダカラ」などの接続詞に当該イントネーションを加えるのは、話順確保のための一つの戦略であろう。ただし、筆者の観察では、別の話者が話している時の割り込みの際に、当該イントネーションが目だっ

て使われている、というわけではないようである。話順確保機能は、自分の話順が来てから発揮されるのであって、対話者の話順を奪取するものではない。また話し始めや提題の「は」に当該イントネーションを使うのは、話順確保のためだけでなく、ある意味で聞き手の注意を喚起するためだとも考えられ、③、④の両方に関連する。さらに、ほぼ息継ぎの箇所当たる言葉の上の特徴<1>に挙げたカラ、ノデ、タラ、ケレドなどの接続詞に現れる当該イントネーションは、切れ目を示すとともにあいづちを促す。日本語におけるあいづちは「聞いている」ことの意味表示でもあるから、対話への聞き手の積極参加を促す機能であるといえるだろう。資料 A-1～3、11、15 を見れば、間投助詞の後と同様、当該イントネーションの後にあいづちが来ることが非常に多いのがわかる。

こうして見ると当該イントネーションの機能①～④の中で、当該イントネーションならではの機能は③と④であり、ごく大雑把に言ってそれは「自分の話しはまだ続くからよく聞いて」ということを示すことであるとも言える。これが「かわいさ」や「甘え」と一見対照的な「ふてぶてしさ」などの印象を招来する可能性があるとの井上(1994)の指摘については、2-4-2 で改めて言及する。

①の機能は、当該イントネーション以外にも間投助詞や、文節末 1 拍を高くする「村岡花子調」にも見られるし、②についても先に述べた通り、やはりフィラーやポーズなど他にも見られる。③、④の機能を担うイントネーションや話法は、ごく最近登場した「擬似疑問」を除けば他に見当たらない。だからこそ柴田(1977a)、原(1992)、山口(1993)が指摘するように、新たに必要となった談話場面での話し方として、当該イントネーションが積極的に採用されたのであろうと考えられる。対話者のいない朗読場面で当該イントネーションが現れない理由もこの点にあると考えられる。つまり、朗読の場合は何を言うべきかも、どのように言うべきかも考える必要がないから、考えるためのポーズはいらないし、聞き手は黙って聞くことが要求されることが多いため、あいづちのきっかけやそのためのポーズも必要ないのである。だからわざわざ当該イントネーションを使う必要はない。もっとも最近のラジオ番組では、DJ が聴衆からの葉書を読む際などには、書き手が実際に話しかけているかのようなリアルな雰囲気 연출 し伝えるために、敢えて当該イントネーションを付けることもある。

さて、ここでは当該イントネーションの持つ個々の機能を見てきたが、もう一つ見落とすことのできない機能がある。それは、当該イントネーションの文体表示機能である。当該イントネーションの現れている資料 A-1～3、11、15(前半)を見ても分かるが、当該イントネーションが単独で使われることは稀である。特に資料 A-1～3、15 の若者の談話には、かなりの頻度で当該イントネーションが現れている。間投助詞の使われ方と似て、当該イントネーションがあ

る一定の頻度で使われることで、ある言葉調子、「話調」が形成される。そこで、当該イントネーションが頻出する「話調」は、何を意味するか、ということが問題になる。この問題については次に考える。

2-3-4. いわゆる「尻上がり」イントネーションの文体表示機能

当該イントネーションが個々に担う機能は先に見た通りである。ここでは、当該イントネーションがある程度の頻度で使われた場合に見られる文体表示機能について考える。「ある程度の頻度で」という表現は非常に曖昧だが、当該イントネーションのことも「話調」と言っても、話す速度や声域や音響的特徴などとも関連するため、何文節ごとに当該イントネーションが出現すれば、当該イントネーションによる「話調」が成立する、というような定義は難しい。それでも、資料 A-1～3(資料 A-3 は後半部分)では、概して平均で3、4文節ごとに出現している。また、資料 A-11～13の間投助詞の出現頻度は、資料 A-1、2の当該イントネーションの出現頻度よりは低い、6、7文節ごととかなり頻繁に現れている。

これらの「話調」をもつ談話がどのような文体を示すかについては、個人差もあるが、年代による差が顕著であると考えられる(注5)。極端な線引きだが、老若2世代をそれぞれの極として、それぞれに典型的な「話調」の捕らえ方を見ていく。はじめに年配者層について見る。

一般に年配者の講義などの改まった場面の談話には、資料 A-6のようにほとんど当該イントネーションが現れないか、資料 A-7のようにわずかに当該イントネーションが現れる程度である。いずれにしても、資料 A-6の「まあ、そういうふうないきさつを経てですね えー その月世界旅行物語が 再び えー こ、この時代から動き出すわけですけども この一」や、資料 A-7の「えー た、例えば あの一親からいつも打擲されて怒鳴られてるということだけでなく ですね」に見られるように、「エー」や「マア」、「アノー」や「コノー」、「～デスネ」などのフィラーが多く見られるのが特徴である。改まった討論の場面では一貫して当該イントネーションが現れない話者もいるが、資料 A-4、5の話者のように冒頭部(資料 A-4)では当該イントネーションが出ないが、議論が白熱する中間部(資料 A-5)では当該イントネーションが出現するというパターンも見られる。一方くだけた場面では、資料 A-11～13のように、相当な年配者の場合、男女を問わず間投助詞が頻繁に使われ、当該イントネーションはあまり現れないか全く現れない。

この年代は、そもそも当該イントネーションを非難した年代である。また、非難されたことを知る者も多い。非難した年代は、もともと当該イントネーションを使わず、改まった場面

は「エー、～デスネ」を、くだけた場面では間投助詞を使う。また、非難されたことを知る人は、改まった場面では当該イントネーションを使わないようにしようと努力する。ただしそれがどの程度実行できるかには個人差があり、さらに場面の改まり度の認識にも個人差があることは言うまでもない。また当該イントネーション使用への非難の及びにくい、くだけた場面では、間投助詞の使用が規制されたこともあるかもしれないが、間投助詞と当該イントネーションが併用されることもある。しかしそれについても先に述べたように個人差もあるし、若い方がより多く当該イントネーション使用するという年代差も見られる。

年配層が当該イントネーションを非難する理由は、単に耳慣れない耳障りな話し方だからというだけではないようである。実際、当該イントネーションの音調は講演などで聞かれる昇降調との類似が川上(1956a)ですでに指摘されている。それにもかかわらず、当該イントネーションは、むしろ流行語・俗語の現れるような、低い文体と結び付けられている点に、非難される一因があると考えられる(詳細は 2-4 に譲る)。いずれにせよ、このような当該イントネーションに対する文体的に低い位置付けが年配層には明確に見られる。しかし彼ら自身は、基本的には当該イントネーションを使わないため、極論すれば、年配層には当該イントネーションのない「アー、エー」の入る「話調」と間投助詞の頻出する「話調」という、「話調」について高低2段階の文体的な階層構造が見られると言えるだろう。

次に若者に関して見ていく。若者についても、朗読や資料 A-8～10 のような緊張して会話がはずまないインタビュー談話では、当該イントネーションが現れにくい。しかし、討論の場面では年配者より明らかに頻繁に当該イントネーションが出現する。また、同じ討論場面でも、資料 A-3 から分かるように、当該イントネーションと間投助詞は、対話者により使い分けられるケースもある。資料 A-3 を見ると、前半の同年代の参加者に向けて話す場面、いわば「タメ口」では間投助詞が使われ、後半の司会者に向かって話す場面では間投助詞が現れず、代わって当該イントネーションが現れる様子が伺える。若い世代では、当該イントネーションのほうが間投助詞より改まった場面に適した話し方であると考えられていることを示す一つの例である。しかし、資料 A-10 のインタビューからもわかるが、さらに改まった場面では当該イントネーションが使われない。資料 A-10 の中学生 C の「朝-6 時-半に起きて で、あ、えーはい 35 分まで着替えをします。35 分から 45 分まで朝食をとり、45 分から 50 分までにだいたい仕度ですね。…」という発話の中には、「エー」などのフィラーの他にも、普段の話し言葉ではほとんど聞かれない「朝食をとり」という連用中止形が見られる。この中学生 C が当該イントネーションを普段使わないわけではないことは、インタビューの終了間際になり、少し打ち解けて笑いが混じるようになってからの発話部分「違う違う、朝練あるけどお、これあんまり言

わないで下さい、言わないけど 遅れたってあんまり怒られやしないからあ。(笑い)」を見れば明らかである。少なくともこの中学生 C の場合は、ある程度上の年齢層と同様に、改まった場面では間投助詞はもちろん、当該イントネーションも使うべきでないという使い分けに関するルールを持っており、それがきちんと実践されたものと考えられる。

しかし一般的には、若者の当該イントネーションに対する改まりの程度の位置付けは、ある意味で彼らの服装のように、まちまちであると言えるだろう。成人式一つとっても、振袖からジーン姿まで様々な格好の若者が集っている。テレビ慣れしていれば、テレビに出演していてもそれほど「改まり」を感じないだろう。間投助詞が多用される「話調」よりは当該イントネーションの「話調」、当該イントネーションが多用されるよりはそれがない(ただし一般的には「アー、エー」などが入る)「話調」、という文体に関する階層構造の存在はおそらく若い世代でも知っている。しかしどんなに改まった場面でも、以前ほどは「紋付袴」が登場しないのと同様、「アー、エー」が多用される「話調」は、若い世代の談話にはあまり現れなくなった。

これと軌を一にするように、若い世代では友人同士のお喋りなどのくだけた場面でも、間投助詞の使用が減り当該イントネーションが増えたことはすでに上村(1989)などが指摘している通りである(2-1-2 参照)。しかし、だからと言って、くだけた場面なら誰でもどんな場面でも均等に当該イントネーションの使用が増加しているかと言うと、そうとは言えないようである。

例えば資料 A-14、15 はいずれも女子大学生の自由談話だが、資料 A-15 の大学生 C は非常に多く当該イントネーションを使うが、資料 A-14 の大学生 A はあまり使わないなど、個人差も見られる。また個人差だけでなく、資料 A-14 前半の会話が途切れそうになり、話が弾まない場面では当該イントネーションは現れず、バドミントン部について話が盛り上がっている場面では現れたり、資料 A-15 の大学生 C のように他人の研究を説明するところで当該イントネーションが多用されたりするなど、当該イントネーションの頻度は、談話の性格とより密接に関連していることが伺える。

くだけた場面ではないが、先に見た資料 A-8~10 の中学生 A も一問一答の箇所では当該イントネーションはほとんど現れないが、資料 A-8 の中学生 A の「理科でえ 嫌いなのは一 数学。」や資料 A-9 の中学生 B の「ソナチネとおバッハとおハノンとお」、資料 A-10 の中学生 C の「出身小学校はあ ええ 附属小です。」などのように、2-3-1 で見た言葉の上での当該イントネーションが現れやすい箇所には現れる。つまり場面の改まりではなく、文型や談話の性格との関連で使用する傾向が見られる。ここに挙げた例以外にも、中学生のインタビューでは、他の箇所に当該イントネーションが現れなくても、「名前はあ***でえ、出身小学校はあ***」というパターンや、何かを列挙する場合、道順を説明する箇所での当該イントネーションの出現率は非常

に高く、インタビューしたクラスのほとんどの生徒に見られた。

以上の点を総合すると、若年層では年配者層と異なり、当該イントネーションの「話調」が、必ずしも文体の低さを示すとは限らないが、それでも、高い順に、当該イントネーションも間投助詞もない(ただし多くの場合「アー、エー」などが入る)「話調」、当該イントネーションの「話調」、間投助詞の「話調」という、「話調」と文体についてのゆるい階層構造が見られる。そして若年層では当該イントネーションの出現・不出現の決定には、場面の改まりの程度、改まり度合いという要因があまり強く影響せず、それ以上に、各言語形式の機能による使い分けが進んでいるということがとりわけ重要な点だと言えるだろう。これは、近代化に伴う人間関係における機能的役割の重視や、敬語史に見られる絶対敬語から相対敬語への推移にみられるような言語の機能的重視の傾向とも無関係ではないと考えられるからだ。

ここでは便宜上年配層、若年層に分けて述べたが、言語変化は連続的な現象だから、実際このような二分化は不可能だし、それだけでは意味がない。最後に当該イントネーションの出現と場面、年代の関係を図Ⅱ10に示すと以下のようになるだろう。この図は年配層、若年層を両極においてその中間の層についても連続的に表したものである。言うに及ばず、現実の使用状況をごく単純に模式化したにすぎない。しかも、実際はここで述べた使用状況とは異なった様々なステレオタイプも見られる。次の2-4ではこれらのステレオタイプがどのようなものか、あるいは、それがどのような社会状況で生じたのかについて考える。

図Ⅱ10 談話のタイプと年齢、改まり度合いとの関係

